

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：34428

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25420661

研究課題名(和文) スペイン植民都市図が示す「都市計画」の近代性に関する研究

研究課題名(英文) A study on the modernity of urban planning illustrated in the Spanish colonial town plans

研究代表者

加嶋 章博 (KASHIMA, AKIHIRO)

摂南大学・理工学部・教授

研究者番号：80390144

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：主にインディアス古文書館が所蔵するスペイン植民地時代のニュータウン建設時に描かれた都市図の分析から、「都市計画」という概念が未成立の時代に、都市計画に相当する表現行為がどのようなものであったかを整理し、近代初期ヨーロッパの都市計画史研究における新たな知見を得た。論文4編(うち審査付き3編)、学会発表・講演として4件の成果を上げた。また、学術的知見を日本との比較から考察し、スペイン・バジャドリッド大学において招待講演を行い、国際交流にも役立てることができた。

研究成果の概要(英文)：This research studied how the town planning was like in the Spanish colonial period when many new towns were constructed and when the concept of "town planning" was not yet established, analyzing many town plans preserved in the General Archive of the Indies. The results of this research provided a certain amount of knowledge in the European urban planning history research of the early modern period. Considering the scientific findings in comparison with Japanese urban space, this achievement also helped us to make international exchange through the invited lecture at the University of Valladolid.

研究分野：都市計画・建築計画

キーワード：スペイン 植民都市 都市計画図 理想都市 広場計画 インディアス法

1. 研究開始当初の背景

19世紀以降の近代都市計画においては、健康で豊かな住環境を獲得すべく、道路や街区を均質に配列し、平等性のある都市空間を建設する一方で、その都市に多様性が生まれ、特色のある豊かな界隈が創造されるような都市空間を展望してきた。19世紀に城壁が取り壊されたヨーロッパ近代都市では、鉄道の発達もあり、都市の物理的境界が弱くなり、都市は拡張していくものとなった。このような近代以降の都市計画の転換は、機能主義的な思想を基盤としながら洗練され、技術的にも発展してきた。こうした技術や思想の基盤を形成してきた近代都市計画の理論や手法が今日の都市計画という概念形成の根幹をなすものと理解される。しかしながら、都市計画という概念が未だ確立していないルネサンスの時代に目を向けても、既にこうした近代以降の都市作りに相当する均質性と多様性の創造に繋がる都市作りの考え方は様々な史料において確認することができ、明らかに都市の計画性を見て取れる例は実存する都市空間においても、また、計画時に作成された都市図においても少なくない。しかしこうした観点から、実際のルネサンス期以降の都市計画の事例を対象にした検証の蓄積は今のところ多くない。

そこで、技術的な限界もあった近世における「都市計画」という行為、あるいは、それに準じる行為は、一体どのようなものとして捉えられてきたのかを明らかにするという仮説を立て、近代都市計画のオリジナリティ神話を批判的に乗り越え、近世と近代の都市計画思想の連続性を検証したい。膨大な数の植民都市を建設したスペイン植民地時代の都市建設事業において残された数多くの都市図の分析は、本研究に大いに有効であり、多くの情報を提供してくれる。さらに、こうした視点からの研究成果には、近代に築かれた都市計画遺産の新たな価値を後付けできる可能性もあることを踏まえ、近代都市計画史研究の新しい観点を開拓していきたい。

2. 研究の目的

筆者は、本研究の基底となる考え方として、「前近代的都市計画思想と近代都市計画思想の連続性をテキスト(文言)とイメージ(視覚表現資料)から明らかにする」という研究視座を描いている。

そこでまず本研究では「都市計画」という概念が未だ成立していない時代に作成されたスペイン植民都市の都市像(都市図や都市計画図から読み取れるもの)に、近代都市計画の起点を見出すことを目的としている。当時の植民都市は現在まで実存していたとしても今日では当初と比べて姿を変えているケースが多いため、都市図や都市計画図の分析のほうが都市の計画性についてより客観的に解読出来ると考えられる。

近代都市計画には、「ゾーニング」「均質街

区」「緑地」「パブリック・スペース」「施設配置」「多様性」「サーキュレーション」など様々なキー概念がある。これらと類似する概念や基盤となる計画思想をルネサンス期以降の前近代的な都市の計画において検証することが本研究の狙いである。

3. 研究の方法

本研究では、主としてスペイン植民地時代の統治関連書類を所蔵するスペイン国立インディアス古文書館(セビリア市)の地図・都市図部門の中で、都市図の保存資料が顕著に多いメキシコ、プエノスアイレスの各セクションの相当数のイメージ資料を対象に、以下の作業を行う。

- ・「都市」「都市計画」が描画された都市図の選定。

- ・都市の表現要素の抽出とデータベース化。これは、都市内と都市外の描画対象、都市核の空間要素、道路・街区・河川等の構成要素、都市広場や都市施設、縮尺や色使い等の表現形式等を抽出する作業となる。

- ・「都市計画」を構成する要素の分析。これは、縮尺の違いにより、都市や都市計画を構成する要素を検討し、どのような事象が「都市計画」行為と見なされるかを考察する。

4. 研究成果

(1) 学術的業績

まず、本研究の目的を明確にするため、スペイン植民地時代の都市計画手法を整理し、近代都市計画との関係性を見て取れることを示した。すなわち、スペイン植民都市のデザイン手法には、均質性と多様性をともに創出しようとする計画性が潜在的に含まれているという点を都市計画法のテキスト分析から示した(論文5-)。これは、1573年に国王フェリーペ 2世法と呼ばれるスペイン植民都市建設法のこれまでの分析を踏まえ、都市空間の均質性を創造、維持していくための道路と街区の計画性と、都市空間に多様性を創出していくための広場および施設の配置計画を整理したものである。

つぎに、近代都市計画と植民地時代の街区や土地区画のスケールに着目した研究が(論文5-)である。土地区画や街区割に關係する法制度から、歴史的にどのようなスケールにより土地を区分してきたのか、その傾向を分析した。結果として、近代都市計画にも共通するスケールが採用される傾向を窺い知ることができた。

さらに、この包括的な論考(和文)については英文とし、扱う街区のスケールについて視覚的に分析し、大幅に加筆して、国際都市計画史学会(International Planning and History Society)の審査付き大会プロシーディングズとして採択された(論文5-)。ここでは、結果として、格子状に街区を計画する計画において、当時の単位で1辺を140vara程度の区画というスケールに依存する傾向

が高かったことを歴史的に示した。全ての植民都市がこの寸法に適合するわけではないが、この街区スケールは、近代都市計画の代表事例であるバルセロナ都市拡張計画における街区のスケールに通じるものであり、近世都市計画と近代都市計画の連続性を示唆した。しかも、バルセロナ都市拡張計画を提示したセルダは、詳細は述べていないものの、計画にあたりスペイン植民都市計画を参照した記述を残している。

スペイン植民地時代に建設された旧スペイン都市の都市像は一定のイメージをもって理解されている。それらは、実際の格子状パターンによる都市計画にその要因を見出せるが、スペイン植民地の都市空間構造に関する既往研究の特徴が一定のイメージ創出に関係していることも考えられる。この点について、スペイン植民都市の都市像として既往研究がどのような説明を行ってきたのかを概観する論考をまとめた(論文5-)。関連研究の多くが、スペイン植民都市の理解を助けるために、1573年公布の都市建設法である「フェリーペ二世の勅令」の条文解釈を伴うが、偏った条文を抽出しているものが多い。その原因は、16世紀スペイン語で書かれた原史料を解読した20世紀初頭の都市計画史研究論文において、限定的に抽出された条文が英文に翻訳されたことと関係することを指摘した。今日でも、そうした研究が散見されることは、スペイン植民地の都市像の創出、すなわち、スペイン植民都市の特徴についての説明付けに強く影響しているとみられる。

スペイン植民地時代の都市計画思想に影響を受けたと考えられる1859年に提示されたバルセロナ都市拡張計画は、正方形街区が133.3mピッチで均質に敷き詰められたグリッド・パターンによる都市計画であるが、街区内の多様な住棟配置や複数街区の複合利用などにより、決して均質な町並みが生まれているわけではない。むしろ、多様な都市空間がそこにある。A・ガウディが設計したサグラダ・ファミリア聖堂が建つ街区もそのような利用法の一つであり、都市の多様性を創出している。結果として、強い均質性をもったプランニングから多様な境界の創出を可能にしていることが窺える。(発表5-)では、この事について、建築家ガウディの展覧会において講演する機会を得た。

さらに、スペイン植民都市計画において重要な要素であった都市広場であるマヨール広場は、いわば空っぽのオープン街区である。ヨーロッパの伝統であるこの広場は、道路の延長線上にある空間であり、柵で囲われた境界線が設けられた都市公園とは明らかに性格が異なる。わが国においては、都市公園や街区公園といった境界線が明確に存在しているものは多いが、道路の延長線上にある広場型のパブリック・スペースは少ない。広場型は、道路の延長線上であることから、時間や季節により様々な用途に使われ、多機能で

あり、多様な使われ方を許容する。こうした都市広場がスペイン植民地のニュータウン計画においても主要な要素として位置付けられ、そこが現実に都市の多様な様相を生み出す場として機能してきた。近代都市計画においてもこうした点を継承していることは自然なことであるが、わが国の都市形成史とは大きく異なる側面として着目される。このことについて、スペイン・バジャドリッド大学建築学部において、「La Plaza Mayor vista desde Japón 日本から見たマヨール広場」と題し、日本とスペインの都市形成を比較する講演を行い、意見交換を行った(発表5-)。

(2) 参考資料「主要論文概要」

<5->論文概要

スペイン植民市計画史に関する20世紀の研究史を俯瞰し、植民都市であった旧スペイン都市がもつ都市像がどのようなものであったかを考察した。広場を起点としたグリッド・パターンの均質な都市空間構造というのが旧スペイン植民都市の強い都市イメージである。しかしこの説明は、スペイン植民地の都市計画を規定したフェリーペ二世法が多様な都市空間の創造を意図した部分が含まれていることと相反する。このことは、20世紀初頭の当該規範の先駆的研究において、同法から偏った条文のみが抽出され、均質な都市空間の計画性のみが焦点が当てられたことによる可能性が強いことを指摘した。

<5->論文概要

(和文概要) 国際都市計画史学会 International Planning History Society 第16回フロリダ大会の投稿論文。査読付き本文をプロシーディングズに掲載の上、発表報告を行った。スペイン植民地の都市がどのような尺度をもとに計画されていたかの考察をふまえ、土地がどのようなスケールや寸法で区画されてきたのかを当時の法規制をもとに検討した。結果、スペイン植民地都市計画理念としてのグリッド・パターンとその慣習的なスケールならびに土地区画形状の関係を導き、スペイン近代都市計画の実例との関連を示唆した。

(英文概要) Historically Spain had the experience of many town planning in European Renaissance period. It has been often pointed out that among the colonial towns there is a commonality in the town spatial structure with a grid pattern surrounding the main square. This study aims to organize how the scale of town planning was captured as planning action for new town in those days, examining the norms referring to the land allocation that affect the urban spatial structure in the early stage of the Spanish colonial period.

As a conclusion, there were no specific norms to induce the entire town layout in the early stage of the Spanish colonial period, but it is pointed

out that there was a process of codification with an emphasis on the "orderly" planned town since early in the 16th century. Concretely the regulations provide the idea that the town blocks should be repeated in an orderly manner so that town can continuously extend itself. Here the key concept is the idea defining the repeated form of town blocks by making an orderly town nucleus in the first stage planning.

The order-oriented criterion is also expressed in the concrete norms about land allocation and it is obvious that the length unit "vara" became a common unit for the standard land allocation. Also a scale of a block, about 300 to 500 pies (100 to 166 varas), is often seen in the norms about the town's nucleus planning. Besides, the ideal scale for the town blocks indicated in the Ordinances of Philip II is also 140-150 varas for each side. Although the norms were arranged to measure the territories using the same unit between the colonies and the home country, the scale of land allocation in the colonies is distinctly-different from the scale in the home country Spain.

Although there is no norm that refers to the layout of the entire town, it is pointed out that there was the development of norms providing perspectives, on town planning incorporating peculiar scale as described above, repeated layout of town blocks, well-conceived planning proactive of town's extension, and standardization of plotting and unification of the land allocation. These perspectives form a strong commonality found in town space structure of the Spanish colonies. In other words, these views found in the colonial norms related to the land allocation in the early colonial stage suggest that they became a key factor to produce grid towns with a unique scale in comparison with the urban development of the home country.

<5 - >論文概要

16世紀にスペインが植民地開拓のために発行した都市建設に関する規範ならびに土地区画に関する規範をそれぞれ抽出した。また、実際の都市建設事例に見られる都市核の尺度を整理した。これらより都市計画をどのような尺度で実践するものと捉えていたのかを考察した。結果として、近代都市計画にも通じる街区スケールで都市核を整然と計画しておき、都市拡張時は街区レイアウトを反復していく方針が窺えた。

<5 - >論文概要

スペインが中南米をはじめとする植民地において数多く実践した都市計画の手法を論じた。イタリア・ルネサンスの建築理論との比較を通じて、都市の計画手法そのものに均質性と多様性を共存させる手法であること

を示した。グリッドプランによる均質性の高い空間構成を導く一方で、道路や広場のあり方や都市景観の視覚的効果についての検討から、都市空間に多様性を与えようとする態度も同時に認められることを示した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

加嶋章博：スペイン植民地都市計画の研究史を読む -ラテンアメリカ都市像はいかに構築されたか-、『都市史研究II』都市史学会編、山川出版社、2015年(11月出版予定)、pp.96-105、査読有り。

Akihiro KASHIMA：“Perspectives on Town Planning in the 16th Century Spanish Colonies Focusing on a Town's Scale and its Spatial Structure”，‘Proceedings of the 16th International Planning History Society, Select Full Papers -Volume 1-’，University of Florida and Flagler College, 2014, pp.534-545、査読有り。

加嶋章博：スペイン植民地法に見られる植民初期の都市計画の尺度に関する試論『都市計画論文集』Vol.48、日本都市計画学会、2013年、pp.219-224、査読有り。

加嶋章博：16世紀スペインの理想都市計画-植民地の都市計画理念に見られる均質性と多様性-、『第3回西洋建築史若手研究者研究発表会報告集：ルネサンス期の都市と建築を考える～理想都市と築城をめぐる～』日本建築学会編、2013年、pp.11-18。

〔学会発表〕(計4件)

Akihiro Kashima：“La Plaza Mayor vista desde Japón”，2015年2月19日、バジャドリッド大学建築学部、スペイン。

加嶋章博：「ガウディの眼差し、ガウディへの眼差し」、兵庫県立美術館「建築家 ガウディ×漫画家 井上雄彦」展開催記念講演会、2015年3月21日、兵庫県

加嶋章博：「ラテンアメリカ都市史」、2014年度都市史学会大会(京都)シンポジウム：都市史の現在II、2014年12月14日、京都工芸繊維大学、京都府。

加嶋章博：1581年公布の尺度に関する勅令について-スペイン植民地時代の「都市計画」の概念構築に関する研究-、『学術講演梗概集(都市計画)』日本建築学会、2013年9月1日、北海道。

〔その他〕

<http://www.setsunan.ac.jp/~kashima/index.html> (代表者ホームページ)

6. 研究組織

(1)研究代表者

加嶋 章博(KASHIMA, Akihiro)

摂南大学・理工学部建築学科・教授

研究者番号：80390144